

【旧約聖書日課】エレミヤ書 23章1～6節

1「災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは」と主は言われる。2それゆえ、イスラエルの神、主はわたしの民を牧する牧者たちについて、こう言われる。

「あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」と主は言われる。

3「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。4彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。

5 見よ、このような日が来る、と主は言われる。

わたしはグビデのために正しい若枝を起こす。

王は治め、栄え

この国に正義と恵みの業を行う。

6 彼の代にユダは救われ

イスラエルは安らかに住む。

彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 1章4～8節

4⁵ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また、玉座の前におられる七つの霊から、更に、証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように。わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放して下さった方に、⁶わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司として下さった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。

7 見よ、その方が雲に乗って来られる。

すべての人の目が彼を仰ぎ見る、

ことに、彼を突き刺した者どもは。

地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。

然り、アーメン。

⁸神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。

「わたしはアルファであり、オメガである。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 18章33～40節

³³そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。³⁴イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」³⁵ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」³⁶イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」³⁷そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」³⁸ピラトは言った。「真理とは何か。」

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。³⁹ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」⁴⁰すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

雲に乗って来られる！【こども説教のために】

イースターにご復活なさった主イエスは、それから 40 日後、弟子たちの見ている前で天に上げられ、雲に覆われて見えなくなってしまうれました（使徒 1:9）。けれども、弟子たちは、悲しみに暮れはしませんでした。天を見つめていた弟子たちの前に白い服を着た二人の人が現れて、「主イエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」（同 1:10~11）と告げたからです。弟子たちの教会は、終わりの日、「終末」のときに主イエスが再び雲に乗って来られると信じて、主イエスが地上にいらしたときと同じように主イエスに従って生きる歩みを続けたのです。

「見よ、その方が雲に乗って来られる」と、僕ヨハネはアジアの七つの教会に向けて告げました。ヨハネは、すでに主イエスが再びおいでになるときに来ていると言っているのです。主イエスは、わたしたちが見上げる天のあなたで悠々としてられるのではありません。今も、雲に乗って来られるようにして、わたしたちの目に映るように現れてくださっているのです。そのお姿を「見よ」と、ヨハネは、わたしたちに呼びかけています。

このお方が、わたしたちを全能者、神である主の前に立たせてくださるのです。神は、わたしたちを愛し、罪から解放してく下さるお方です。

今おられ、かつておられ、やがて来られる方

わたしたちの教会が属する日本基督教団では、「終末主日」を「収穫感謝日」として記念してきました。北米の「感謝祭（サンクスギビング・デー）」に倣って定められたとされますが、日本固有の収穫感謝祭である宮中祭祀「新嘗祭」がこの時期に祝われてきたこととも無関係ではないでしょう。実際、前任地教会では、この季節に献げられる献金を神社に奉納する「初穂料」に倣って「初穂献金」と称していました。他方で「聖書」では、「初穂」と言えば初夏に最初の収穫となる小麦の初穂で、初穂を神に献げるのが「七週祭」すなわち「ペンテコステ」とされているのです。

その前任地教会では、主日礼拝の初めには必ず、讚美歌「聖なるかな」（『讚美歌 21』83 番）が歌われていました。以前の『讚美歌』（1954 年版、546 番）では「聖なるかな」の三唱に続いて「むかひまし、いまいまし、とわにいます主をたたえん」と続く歌詞だった讚美歌です。今日の使徒書日課（ヨハネの黙示録）で二度繰り返されている、「**今おられ、かつておられ、やがて来られる方**」（文語訳では「今在し、昔在し、後來たりたまふ者」）から取られた歌詞です。ただし、聖句通りではありません。「**やがて来られる方**」は、「とわにいます主」に変えられています。初代教会の時代、もっぱら「終末」に再臨なさるとされてきた主イエス・キリストが、次第に、昔いらっしや、今もおいでくださっているように、これから後もいつまでも共にいてくださるという信仰に変えられてきたことを示しているのでしょう。

わたしたちが「神」とお呼びするお方がいる以上、そのお方が過去も現在も将来も変わることなく在られることは、当たり前のことかもしれません。「神」を「神」として信じ、礼拝するとは、そういうことです。時代によって移り変わってしまうものや、気分次第で態度が変わり一貫性のないものを「神」とすることはできない。それが、旧約の預言者たちが問うてきたことでした。もちろん、主イエスも、弟子たちの教会も、そのような「神」を信じ、頼りにし、その恵みにあずかることを教えてきたのです。

ところで、「黙示録」のヨハネが「**今おられ、かつておられ、やがて来られる方**」と二度繰り返しているお方は、厳密に言えば「**神である主**」であり「**全能者**」のことです。わたしたちが「天の御父」とお呼びするお方のことです。御子であるキリストのことではありません。そうだとすると、ヨハネはすでに、御父である神とキリストを一体のお方として見ているのでしょう。御父が「**やがて来られる**」というのは、キリストが「**雲に乗って来られる**」ことによって実現するのです。天の遙かあなたに在られるとされていたお方は、わたしたちがそこに行かずとも、今も昔もこれからも、お会いすることができる、かつて来られたキリストによって。そう言われているのです。

キリストを仰ぎ見て

多くのキリスト者が、死んだ後に「天国に行く」と言います。キリスト者でなくても、多くの者が、死んだら「天国に行く」と信じているのです。そこに皆行き、いずれそこで再会することができるとの希望をもって、先に地上の歩みを終えられた方々との別れをいたします。

キリスト者の中には、「洗礼を受けて忠実に信仰を貫いた者だけが天国に行くことができる」と考えている者もあります。確かに、地上の現実の中には、不条理があるのです。善人が非業の死を遂げる一方で、悪人が安穩と暮らし安らかな死を迎えているようにしか思えない現実が、昔も今もあるのです。すべての者が等しく「天国」に迎えられるなどということは到底受け入れられない、と考える者があっても、当然でしょう。

それでも、「黙示録」のヨハネは、その日、**雲に乗って来られる方を、すべての人の目が…仰ぎ見る**、と告げます。「**ことに、彼を突き刺した者ども**」がそうする、とさえ言うのです。

ヨハネは、この「黙示録」を記したとき、**パトモスと呼ばれる島**（黙 1:9）に幽閉されていたといえます。教会指導者として当局に捕らえられ、流刑にされていたのでしょう。彼は、世の権力者を批判し、呪い、滅びを宣言することもできたかもしれませんが、そうはしませんでした。彼を迫害する者たちのことを、かつて主イエスを迫害した者らと共に、いつの日か彼らもキリストを仰ぎ見る者になるだろうと、希望をもって見ていたのです。

それは、ヨハネにとっては、「終末」という遙か先のことではなかったはずですが。「**今**」であり、「**かつて**」であり、「**やがて**」でもある。ヨハネは、そう言うのです。今、**雲に乗って来られる方**は、かつて幼子としておいでくださったお方であり、やがてまた雲に乗って来られるのです。ご復活から 40 日目のあの日、弟子たちが天を見上げる中、雲に覆われて見えなくなられたというお方は、消えてしまわれたわけではない。その雲に乗って、今もおいでになられている。いつでも、雲に乗っておいでになられる。

そのお姿を、わたしたちも天を見上げたとき、仰ぎ見ることができるでしょう。もちろん、厚い雲に覆われてよく見えないときもあるかもしれませんが、常に見上げていれば、雲は必ず晴れるのです。そこにキリストのお姿を仰ぎ見ることはできるのです。キリストは、天の遙か遠くにはではなく、雲に乗って、わたしたちの仰ぎ見ることのできる場所においでなのです。そこで、かつて地上でお示しくくださったお姿、その教えを、思い起こさせてくださっています。だから、わたしたちは、地上で生きるのです。地上でこそ、神の前に立ち、キリストと共に生きるのです。「地上に神なし」であっても、わたしたちには、見上げることのできるお方が確かにあるのです。